



FAVORITE 2014 展は、ここ数年ステップスで個展またはグループ展に参加したアーティストで構成されている。旧作と新作が交じることによって、これまでステップスに通ってきた者にとっては記憶が混在し、初めてステップスに訪れる者にとっては新鮮な印象を与える。

画廊入り口と中の壁面、事務所に飾られるのは倉重光則の新作三点である。倉重は「指で描いている」らしいが、画面一杯に絵具を乗せて速攻で指を用いて描く割には背景となる絵具が均一ではない。ここにはオールオーバーの神話の崩壊が隠されている。倉重の作品は絵ではないのだ。金知鉉は旧作三点、新作三点である。ドローイングと写真という平面であってもパフォーマンス的な空間性に満ち溢れている。それは空間を切り裂いたり、反対に一体化するのではなく、空間と作品が共存し、作品が空間を「舐めて」いたり「撫でて」いるような印象を与える。

吉岡のコレクションでもある津田亜紀子のトルソーは今回、竹内博の新作五点と並んだ。竹内の作品は場所性と時代性がない。「切った」「触れた」痕跡も残さない。そのような要素を問う必要がないのだ。それによって「皮膚」的な津田の作品の存在自体が減法する。

古賀亜希子は人形の写真を撮り続ける。小5、大1枚を出品し、大1枚には自らが写りこんでいるが、徹底的な客観性が見る者を作品の内部に到達できない。幾ら見ても、作品に近づくことすらも不可能なのだ。それは、古賀自身が携える自らを「穿つ」視線がそうさせているのではないか。この空間には視線が「辿る」ルートが幾つも誘発する。それは作品に用意されているのかも知れないが、見る者が生み出していくとも言えるであろう。つまり、作品と観者という境界線が失われるのである。それが、現代美術の基本的な特徴でもある。なぞるのは貴方だ。

